

丹後機業の婦人労働事情

——明治30年ごろから昭和前期まで——

宝 光 井 顕 雅

は じ め に

1980年～81年の本学の丹後半島学術調査に参加して、丹後機業における婦人労働の現状を調査したが、予備調査段階では戦前の婦人労働事情についても若干の資料を得た。戦前といえば丹後機業の始源は享保年間にまでさかのぼるから、既に200年以上の歴史をもっているが、機業婦人の労働史的資料となると、そこまでさかのぼることは到底できなかった。接することのできた資料のなかで、年代が判る最も古いものが1840年代であった。そして参考にできた文献資料も多くはなかった。しかし、加悦および網野では大正・昭和前期（第2次大戦までの昭和期）に縮緬を実際に織っていた人びとから、当時の思い出話を親しく聞かせて貰うことができた。

そこで以上のような文献資料および聴き取りから得た情報を用いて、明治30年ごろから昭和前期までの、丹後機業における婦人労働事情をいささかでも明かにしようと試みたのが本稿である。いうまでもないことだが、今回の調査で得た資料だけで、たとえ明治以後ではあっても戦前の機業婦人労働史が書けるものではない。それを承知の上で本稿をまとめたわけは、一つには今回の調査のために貴重な時間をさかれ、種々の情報を与えて下さった人びとへ、私が学んだことを報告することによって、私の認識の当否を問い返し、更に教示をいただいて本稿の訂正、補足をしたいからである。そして二つには今後と同じようなテーマについて調査研究される人があれば、一つの資料としてほしいからである。

I 明治30年ごろから大正初期まで

1 農商務省の調査がとらえた丹後機業の婦人労働

農商務省商工局工務課工場調査掛が1903（明治36）年3月に発表した「織物職事情」は、それより2年前の明治34年中に行った調査の結果である。その中に丹後機業に関する統計がいくつかあるので、これを見ることから始めよう。

a) 労働力の構造 まず性別構成だが、「東京府八王子外九機業同業組合に就き蒐集したる統計」によると男工と女工との割合は18対82で圧倒的に女工が多い。ただし中郡と竹野郡の2郡だけが調査対象地域になっていたので、この比率をもって丹後機業全体を代表させることはできないが、近似値として考えることはできるであろう。同じ統計で西陣機業の比率は46対54であった。丹後機業

と西陣機業とでは労働力の性別構成がこのように著しく異っていたが、9機業地の平均比率は18対82であって、偶然ながら丹後2郡の平均値と全く同一であった。

年齢構成は、これも丹後機業については2郡に限られているが9才以下は皆無。10～13才が5%，14～19才が36%，20～24才が41%，25～29才が17%，60才以上が1%であった。この構成比を女子だけについてみると、10～13才が6%，それから上の各年齢階級の比率は39%，39%，15%，1%であった。西陣に関しては同種の調査がなかった。

b) 労働時間 地域を特定せずに掲出しているが、それによると季節によって始・終業の時間が異っている。すなわち4月～9月は6時始業で10時終業、10月～3月は5時始業で9時終業としているが、総労働時間は年中16時間で変っていない。同じ調査による西陣の場合は季節によって始・終時間が複雑に変わっており、総労働時間も13時間、14時間、15時間と変化している。もっとも、これらの数値はそれぞれの地域におけるおよその労働時間を示すものであって、丹後においても16時間以下あるいは以上の機屋もあったわけである。そして全国的にみれば、力織機を使用する工場組織のものはたいてい12時間内外であり、これに対して手織機を使用する大小の工場では12～13時間のものは最短で、中には1日17～18時間のものもあった。¹⁾当時の丹後機業では専ら手織機が使われており、力織機が導入されたのは1907年(明治41)年のことであった。

休憩時間と食事時間は「未明より夜分まで労働をなす工場」の場合、朝15分間～20分間、昼30分間～1時間、夕30分間～1時間の食事時間が与えられる他は休憩時間がないのが一般的であって、丹後地方では「朝夕線香半分正午線香一本の休憩時間」であった。線香が燃えつきるまでの間の休憩時間であり、食事はこの時間中にとったのである。しかし「自家製造的小工場の多大数」では所定の食事時間中でもゆっくり休ませず、食事がおわると直ぐに仕事に就かせていた。

d) 食事 「工女が日々快楽とする」ものであったが「一般に粗悪」で主食は米7麦3の割合なら上等で、普通は米3麦7ぐらいの割合であった。副食物はみそ汁、たくあん、菜、大根、芋などの煮つけであった。「丹後縮緬機業地方における食物もほぼこれと同じ」であったとの説明がついている桐生足利地方の食事献立例が掲出されているが、それは以下のとおりであった。

朝飯 挽割飯(米6分麦4分はなはだしきは米4分麦6分)、香の物(たくあん)

昼飯 挽割飯(同上)、香の物(もしくはみそ汁)

夕飯 挽割飯(同上)、みそ汁(もしくは香の物)

なお、3日～5日に一度は昼・夕飯の副食物が野菜煮物に替り、月1回ぐらい目刺干物ぐらいの魚がでた。²⁾

このような食事内容は当時においても粗悪にすぎたのであろうか。「織物職事情」は「これ工女ら唯一の楽しみとする食物こん立の一般なりとする。かかる粗食をしかも不潔なる場所不潔なる器物にて食せしめ一日13時間以上18時間不規則なる労働をなさしむ。身体の發育健全得て望むべからず」と付記している。

e) 賃金 賃金支払の時期は機業地によって異なり、毎月1回のところ、毎月2回のところ、

丹後機業の婦人労働事情

製品が織り上った毎にするところ、半年ごとのところ、あるいは年1回に全額を支払うなど様ざまであった。丹後機業では半年（半季）ごとの支払が普通で、この慣行は昭和前期まで続いた。³⁾ 支払いが半季ごとであったのは契約年限と関係があったわけで、正月から盆までが一契約期間で、それがむと職工は家へ帰り、盆から暮までの期間があらためて契約されることになっていたのである。したがって丹後では勤続期間が短かった。福井・八王子・丹後・愛知の四地方7,844工場を対象とした調査によると、四地方合計では6か月未満が19%、6か月～1か年未満が29%であったのに対し、丹後は6か月未満66.5%、6か月～1か年未満が23.1%にのぼっていた。

ちりめん機業の製品は品質によって機織労働の難易度が異なるので織賃がちがい、また機業主は職工（織工）の熟練の程度によって1日あたりの賃金額に差をもうけていた。そこで1日の賃金を上中下の三通りに分けると「上18銭、中13銭、下7銭ぐらいにして1日平均15銭未満のもの最も多し」という状況であった。一日15銭未満という賃金は、他の機業地においてもやはり多かったようで「以上各種の統計に徴するに織物職工の賃金は一日10銭ないし15銭未満を得る者多く、ことに15才未満の者多数を占む」と述べられている。一日15銭未満の賃金が、当時の社会においてどの程度の水準であったかを知るために、同じ調査者が行なった他職種の賃金をみると次のようであった。通称鉄工といわれる職工賃金の事例として掲げられた日本鉄道会社の業務別賃金表によると旋盤工は55銭ないし58銭、組立工は46銭ないし55銭、仕上工は48銭ないし58銭であった。また呉海軍造船廠職工給類別標準額一覧表によれば、組立工は64銭4厘、仕上工は55銭1厘、鍛冶工は53銭などであった。労働時間は10時間～12時間で、調査時点は明治34年～35年である。

セメント職工については日給職工に関して4工場の調査結果があるが、それによると男工の平均賃金は37銭1厘～52銭6厘、女工は17銭3厘～25銭5厘であった。労働時間は通常11時間。明治35年の調査である。以上は主として男工との比較であるが、いずれの場合も機織工女の賃金は低いのである。しかし横山源之助がその著『日本の下層社会』の中で比べているように、下女に対しては遙かに高かった。横山は「機織工女の得るところ如何とみるに……中略……（伝習生を卒業せば⁴⁾ 12丈物4本ないし5本を織るを得るが故に1本の織賃は85銭、4本織れば3円40銭、5本織れば4円25銭をうるなり。1か月に当れば、50銭にもならざる下女の給料とは非常の相違あるなり⁵⁾」と書いているのである。いま上記した丹後機業の日賃金を、月28日稼動として1か月の賃金に換算すると、中等が3円60銭強、上等が5円余となるのであって、横山の明治29年の調査にもとづく記述とほぼ見合うのである。

f) 寄宿生活 農商務省が調査した時点では織物職工のうち工場附近の者は殆ど通勤し、他地方や遠くから来る者は寄宿するのが一般的であった。その中で丹後機業は「職工総数7,383人すべて寄宿職工なり」と記されている。ここにある職工総数は中郡および竹野郡だけの合計人数であって、このうち女工は6,018人であった。この内には通勤可能な地域に住んでいた者もあったであろうが、例外なく寄宿していたのであった。

寄宿施設について調査員が観察した当時の織物工場の全国的一般的状況が記されているのでそれ

によると、不完全なものが多く通風採光についての配慮がなく、ひどいのは畳をしかずに板の間に薄べりを敷き押入れもなかった。また工場内の一部を寝所にしたり、機台が乱雑に入れてある物置の一部を寝所にしているところもあった。寝具は貸与されたが1人に1具でなく、2人に1具を使わなければならない、その寝具は年2回ぐらい工場主の側で洗滌していたが、概して不潔で中には縞がらが判然と見えないほど油じみたものもあったという。

この状況は後述するように、大正期についての今回の調査結果と大きい隔りがみられないから、明治30年代の丹後における女工の寄宿生活も上記のようであったと考えてよいだろう。

2 細井和喜蔵による丹後機業労働の描写

『女工哀史』の著者、細井和喜蔵は与謝郡の加悦町で1897(明治30)年に生まれている。俚謡に、^か加悦の谷とは誰がいうたよゆた地獄谷かや日も射さぬ、とうたわれている加悦であるが、彼は『女工哀史』を書きおえると直ぐに『奴隷』という小説を書いた。

さきの『女工哀史』は周知のように紡績女工の生活記録だが、『奴隷』は郷里である加悦の大きな縮緬機屋を舞台とした小説であった。小説だから当然にフィクションを含んでいるし、そのうえ細井が丹後の機屋で実際に働いたのは4年間ぐらいで、しかもその経験は小説執筆時からすると10数年前のことであった。したがって小説に描かれている機業労働の有様をそのまま事実として受け取ることはできないにしても、明治40年代から大正初期ごろの実際が描かれている筈であるから、以下『奴隷』にしたがって機業労働事情をうかがうことにする。

a) 機先奉公

お繁が^{はたさき}機先奉公におくられるくだりがある。お繁は小作人の娘で7才〜8才、学令になったが「女子は手習なんぞせんでもええさかい」と学校へは上げてもらえず、地主でかつ機屋である駒忠へ機先として住み込まれる。機先とは縮緬機の織手の下働きをする補助労働者で、織手の手伝いをしながら見よう見真似で機織りをおぼえ、数年後に織手へ昇格させてもらう職種であった。お繁の年令では先述の農商務省の統計からみて機先になるにはまだ少し早いわけで、実際には食事ごしらえの手伝いとか風呂炊きとか子守りなどの雑用に使われたのであろう。その次に^{くだまき}管巻をおぼえ、それから⁶⁾機先へ進むという順序であったと思われる。

それはともあれ、お繁の父が駒忠へ差入れた証文は「一金壹百円也、但し返済の儀は娘しげの給金6ケ年分に相当て申候也」というもので、お繁は父親の借金と引換えに6年の年季奉公に出されたのである。丹後では半年季ないし1年季の勤めが一般的であることは先述したところだが、それ以上の長期勤続がなかったわけではなく、竹野郡だけに限するさきの農商務省調査でも3年以上5年未満46人、5年以上34人があがっていたから、年季奉公は少数ながらあったのであり、お繁はその一例だと考えられる。次にお繁の駒忠での仕事だが、「今日もまた炊事当番にあたって、奉公人全体20人以上の賄いを一手に引き渡された」とあるように、食事ごしらえに当らされているが「織物職事情」においても「賄はたいてい工場主の営むところなるも、地方により工女らに自炊せし

むるの慣習あり、この法は各工女交代にて自炊当番をなすものとす……」とあるから、機先のこの役目はごく普通のことであったといえるだろう。

お繁は飯炊きに当っておかみさんから「お前が美味しいご飯食べたさに、こんな日本米ばかりの飯を炊いたんだらう」と叱責されるところがあるが、ここに米麦などの混合率のことが書かれている。駒忠では支那米6升、日本米1升、麦3升の割合にきめられていた。そして副食は朝は大根菜の塩漬を刻んだものだけ。昼は芋苗をザコの出汁で煮たもの、それだけであった。このような主食の混合比率や、副食の内容はこれもまた農商務省による調査結果と大差ないのである。

b) 機業労働の一日

お繁たちの労働は朝5時まえから始まっている。「早や起床の鈴がむごたらしく鳴っていた。4時半である……流しもとへ行って顔を洗っていると、ポ、ポ、ポ、ポッポッポッポッとエクゾースの音を立てて発動機が廻り出した。石油の臭いが頭の芯へ浸みいるようである。」とは石油発動機によって運転する力織機工場の風景描写である。しかし「動力を使わぬ母家の方の職場からは、おり手の歌う淫猥な機織唄が手織機の箴の音にまじって洩れきこえる」から駒忠では当時は手織機と力織機を併用していたのである。『奴隷』はここで機織唄を紹介しているので、その若干をあげると以下のようなものがある。

「織手金柑 機先密柑、車廻しは柚子の皮」

「うちの殿御は可愛い殿御、織ってやりたや兵児帯を」

「丹後但馬は女子の夜這い 男後生楽ねてござる」

「丹後加悦と峯山ちりめんどころ、織手何きるぼろでんち」

機織唄については後にあらためて述べるが、手織で織る織手たちによって歌われたものであって、力織機になるとその騒音のために歌声が消されてしまうから歌われることがなくなってしまった。

駒忠では終業は夜の9時半で、それから奉公人たちは風呂へ入った。始業は午前5時かそれ以前であるから労働時間はやはり16時間前後ということになるであろう。風呂は五右衛門風呂で「流しが不完全なため、みな桶のなかで垢を落すゆえ湯は白く濁ってふんと厭な臭いが鼻をつく」ようなものであった。寝所は男女別だがいずれも工場の二階が当てられていて、「どんな厳寒の夜でも火の気を持たせない。きたない煎餅蒲団2枚の中へ、織手は2人ずつ、機先は3人ずつ抱かれ合って寝かされ」ていた。

c) 織手の賃金の高さ 織手の賃金は詳しくは書かれていないが、不幸な作男のことを書いた箇所「職工が40銭ぐらいもうけるのに」とある職工は、前後の文脈から織工と読んで差支えないと考えるので、そうすると駒忠の織手の1日の賃金は40銭ぐらいであったことになる。この日給を月28日稼働として計算すると1か月は11円20銭となる。この金額はさきの「織物職工事情」におけるものと比べると2倍以上の高額である。だがこれは時点の異なる賃金額の比較である。「織物職工事情」における賃金の調査時点は1901（明治34）年であるが『奴隷』の場合の日給額はいつ頃のことであろうか。正確なことは判らないが、細井が機屋づとめをした最後は15才の時といわれており、

それは1916（大正5）年ごろに当るから1日40銭という日給はこの頃のものであると考えてよいのではないか。

ちなみに大正5年頃のサラリーマンの俸給事例をあげると、小学校教員35円、官吏35円、森林官42円（うち12円は出張旅費）、巡查27円、会社員30円などであった。⁷⁾これらと比べると11円20銭という金額は約3分の1あるいはそれ以下である。労働時間をも考慮すると織工は16時間前後であったから、時間あたり賃金で比べるなら『奴隷』に登場する織工たちの賃金は更に低かったことになる。

さらに月額11円20銭の賃金の大きさを評価するための材料を『奴隷』の中から拾いだしてみると次のようなものがある。少年江治が同じ駒忠に丁稚として住み込み奉公するが、彼の1年の給金が5円である。細井は「嘘ほど少額の給料」と書いているが、この給金額は何年間も据置きであったのだろうか。それとも初任給であったのだろうか。もし奉公をはじめた頃の給金だとすれば、江治のモデルが細井自身であったから、明治末年ごろの給料額である。

この江治がある時、主人の妻から「面白い役目を仰せつかった」。それは内密で主人の女性関係の素行を調べることであったが、おかみさんは、成功したら褒美に3円くれると約束する。そのうえ、尾行用自転車の借賃が1円と小遣に30銭とを渡された。江治は内偵中に発見されてしまったが、却って主人の妾から「口止料に5円札を1枚」もらって大喜びをしている。

またある時、江治は隣の但馬へ使いに出されたが、用件は主人が妊ませたうえで親元へ引き取らせた女工の許へ、手切金を届けることであった。その手切金が50円。ちょうど其処へ大阪の紡績会社の募集人が来合わせ、駒忠から手切金を受取った娘を雇い入れることについて親娘と談合し、「2通の証文と引きかえに55円の金」を置く。55円の内訳は「40円が娘の身代金で15円が赤児の手つけ金と、先約金の弁償に当てられるのであった」。赤児は娘が生んだばかりの旦那の子どもだが、女の子であったから、早々に丹後の機屋と雇傭契約が結ばれていた。これが先約で、5円の約束金を貰っていたから破約するとなれば返さなければならない。それが先約金の5円である。こうして、赤ん坊はあたかも商品のように今度は大阪の紡績会社へ転売されたわけで、その手つけ金が10円であった。

3 機織唄（あるいは機屋唄）

丹後には機織唄がたくさんあった。井上正一氏が編者である『丹後の民謡』の中に機屋唄として収録されているのは織手唄、機先唄、管巻唄、車廻し唄などだが総数は81。この内最も多いのは織手唄で53を数える。⁸⁾これらの唄は今日では最早やうたわれることがなく、次第に忘れ去られようとしているが、手機時代の機業婦人労働の姿をうつしている故に貴重な無形の文化財である。手機は大正中期ごろまでは、なお丹後ちりめん機業の主要な労働手段であったと考えられるので、以下いくらかの機織唄によって、当時の機業労働のすがたを描いてみよう。

a) 機業労働のすがた

「織手さん達や神さんじゃやら いつも鳥居の中に住む」

手機の支柱は鳥居のような形をしている。織手はその鳥居の向う側で織っているから神様みたいなものだ。

「織手さんたち けんつよかけて 足の踏みきり ようなされ」

織手はタテ糸をピンと張って、力をこめて織らなければならない。

「織手だと言や名はよいけれど ちゃつぎ織手で らちあかん」

織手にちがいはないが、よく糸を切っては継いで織るような腕の悪い織手では迷惑する。

「節季のせり機せき縮緬は どこの織手も身をやつる」

節季になると織手は競って織り、また早く早くとせかされても織るのでみんな痩せてしまう。

「^{あぜ}綜がついたかと覗いて見たら まんだ鳥居の外にある」

タテ糸にかけてある^{あぜ}竹は織れるほどおさのところへ近づき、おさまで来れば仕事は一段落するのである。そこで^{あぜ}竹を見るのだが、まだ支柱のところまでも来ていない。やれやれまだ織らなければならない。

「落ちてくれるな日の暮れさとく どこに居るやら見えやせん」

ヨコ糸を通す道具である杼（さとく）は下手をすると手許を離れて落ちてしまう。夕方の薄暗くなりだした頃に杼を落そうものなら見付けるのに手間がかかって大変だ。

「綜が着こうが のうつくまいが 太鼓さえ出りゃ 仕舞われる」

綜が着けば仕事の区切りがつくが、たとえ綜がまだ着くところまで織れていなくても、太鼓夜番が太鼓をたたいて廻って来れば、それが終業の合図だから仕事をやめることができる。

「太鼓夜番の音聞くまでは わしが身じゃない お主の身じゃ」

しかし終業のふれ太鼓の音が聞えるまでは、私の身体は雇い主のものだから気ままは許されず、織りつづけなければならない。

「殿御さんなよ窓までおいで 窓で合図がなるわいな」

若い織手たちは男友達が機工場の窓際までやって来るのを待っている。窓のところまで来てくれたら、そこでそっとデートの約束を交すことができるのだから。

「仕舞えしまえと窓から覗く しとる仕事も手につかん」

工場の終業時が近づくと織手たちを待ち切れない若者たちが窓から覗いては、早く仕舞って出てこいとしきりに誘いをかける。それで織手は落着かず仕事の手につかない。

織手たちと近在の青年たちとのこの交流図は丹後地方だけのことではなかった。さきにあげた「織物職工事情」はその中で「夜間その土地若者三々伍々工場の周囲に蛸集しきたり、工女らとたわむる（俗に機場ひやかしと称す）」 「彼ら若者は夜間機場の窓側に佇み場内工女と喃語し遂にこの者と馴染み次の休日もしくは物日等に出会するを約するなり……」と述べているが、このように広くみられたことであつた。そこで機業主の方では「工場もしくは寄宿舍の道路に接するの窓は必ず窓隠を付し光線の射入空気の流通をさまたぐるがごとき装置をなすもの多し」という対応をしていたというが、丹後の機業地ではそのような装置は一般的には無かつたようである。

b) 歌わされた唄

機織唄は織手や機先、管巻きや車廻しが仕事の中で気のむくままに歌ったこともあるだろうが、多分に、機屋の主人に勧められて歌ったものであった。次のような唄がそれを物語っている。⁹⁾

「唄は歌いなれ 話はやめて 話しゃ 仕事のじゃまになる」

「歌い やめいで 仕事をすれば 聞くも良いわな陰からも」

「歌いなされや 歌わぬとても 人が地味なとほめはせぬ」

そこで歌の不得手な者は

「歌え歌えとせめたてられて 歌は出もせぬ 汗が出る」

という仕儀になる。

機屋の主人が歌わせたという観点からすると、たとえば次のような唄は、唄のつくり主も主人側の人間であったのではないかと考えられるのである。

「織手精出せ機先はげめ 車廻しを追うてやろ」

「機を織りたい縮緬機を いつもチャンチャン面白い」

「赤いたすきをちどりにかけて つまが機織る品のよさ」

などは織手や機先を鼓舞する唄であろうし、次の

「管を巻くなら麦粒なりに、山の高いは わながでる」

は管の巻き方を唄で教えている。すなわちヨコ糸を巻きとるときには麦粒の形のように巻かないといけない。山のように高い部分ができる巻方ではヨコ糸の出かたが揃わないから織り上りに拙いところが出てしまうのである。

c) 織手たちのところと生活 けれども唄の多くは織工たちの、すなわち織手、機先、車廻したちがその労働の中でつくり出したものであろう。たとえば

「車廻しが利巧げに言ても 上にゃ居られん庭にいる」

ヨコ糸に強い撚りをかける車廻しの仕事は大てい男のする仕事である。男であるから職場では女性である織手や機先に対して威張っているが、仕事の性格上いつも織手たちよりも一段低い土間にいて働かなければならない。車廻しの日頃の態度を快く思っていない女工たちにはこの状態が可笑しく小気味がいいのであろう。だが、車廻しも負けてはいない。

「織手どきわかいて泣かそじゃないか 織手機織りやぬきがいる」

織手の仕事にはヨコ糸（ぬき）が不可欠。そのヨコ糸を撚っているのは俺たちこの車廻しだ。だから偉そうぶる織手はぶん撲って泣してやろうというのである。

織手と夫婦になった男をうたった唄もある。

「織手妻にもちゃようまもならん いかな晩げも ひごけずり」

織手をしている妻のためには、夫は毎晩ひご（機の道具の一つ）を削って作らなければならない。だから一晩たりとも暇にすごすことはできない。

「織手鼻にもちゃ吹雪の晩に 綜のつくまで門に立つ」

織手の妻は夜業をしていてまだ仕事がおわらない。吹雪の夜道を案じて迎えにきた夫が工場の門のところで待っている。夫は、あるいは乳のみ児をその腕に抱えて寒い中を立っていたのかも知れない。

「日の暮れになりや行灯にあかり 太鼓出るのを待つわいな」

夜業にはあんどんが点された。薄暗いその光の下で織り手は太鼓の合図をまだかまだかと待っている。

「ランプ片手に綜竹片手 親に見せたいこの姿」

時代が下ると行灯は石油ランプへと変った。片手のランプでタテ糸を照らしながら、もう一方の手で綜竹を操作しているのは、まだ年端のゆかない機先である。

「今年 来年 上機先で さ来年から織手する」

織手の下働きをしている機先たちは一日も早く織手になりたい。彼女たちは指折りかぞえてその日を待っているのである。

Ⅱ 大正期および昭和前期

1 手機から力織機へ

丹後へ力織機（動力織機）が導入されたのは明治末期であった。記録によると1908（明治41）年に加悦町に入ったスイス製力織機が最初で、明治44年になると同地の力織機は17台となっている。当時の力織機は石油¹⁰⁾発動機によっていた。

大正期になると丹後に発電所ができたので、電力駆動による力織機が現われた。動力源として電気は石油よりも安価であったから電気モーター利用の力織機は普及したが電力供給事情が窮屈だったから、実際には石油と電力、それにガスが併用された。京都府織物試験場が1918（大正7）年10月に調べた丹後機業における動力利用状況によると、総馬力数は868馬力で、その内訳は吸入瓦斯発動機638馬力、石油発動機159.5馬力、電動力70.5馬力であった。¹¹⁾この頃の力織機の普及状況を丹後全域についてみる資料にはまだ接し得ていないが、加悦町に限れば、それは大正6年128台、同8年295台、同9年412台で急速に伸びていた。他方、手機は減少したわけで大正9年には僅か82台となっていた。¹²⁾

加悦町の力織機の動力源別機台数は不明だが、電動力織機のなかにはその日の電力供給が停止されると直ぐにガス又は石油発動機へ切り替えられるものがあつたようだから、動力源別に機台数を数える意味がなかったのかも知れない。この時期には従来の手機を改良した足踏織機も使用されていた。足踏織機はその名のとおりの人力駆動であつたが機構は力織機とほぼ同様で手機よりも生産性が高かつた。¹³⁾手機と力織機との中間形態の織機であるが丹後で使用されたのは力織機の導入の後であつたといわれる。¹⁴⁾

大正期は力織機がふえたが、なお手機、足踏織機と併用の時期で、力織機への切り換えが完了するのは昭和初頭にあつた丹後大震災の後であつた。

労働手段が変化すると労働力ないし労働形態も変らなければならない。その第一は、手機時代には手機数台に1人の割合で必要であった機先が不要になった¹⁵⁾。そこで機屋へ入職した女子が織手になるまでに通過しなければならなかった管巻→機先→織手の従来のコースはその分だけ短縮されることになった。第二には、織手の労働支出のうち動力としてのエネルギー支出が不要となったことと、力織機が織手の熟練のある部分をその機構の中へ吸収していく程度に依拠して、これまでは1台の織機しか扱えなかった織手が、同時に複数台の織機を操作することができるようになったことである。こうして2台持ち、ときには3台持ちとよばれる織手が出現するようになった。

力織機はまた動力源を人力に頼らないから、織機の運転速度を速めることができるし、それを何時間でも継続することができる。そこで織手の労働強度が高められる可能性が生じた。

2 就業の前後

a) 就業経路 「織物職事情」は「通勤工女は概して土地の者にしてこれらは多く機業伝習の目的をもって職工となれるものなれば、父兄はその土地機業家の最も評判よきものをえらび直接もしくは知己を介して工女たらんことを申込む」と述べていた。これは明治30年ごろの機業地一般の事情だが、大正期の丹後でも事情はほぼ同様であった。

丹後では娘が小学校を卒業する頃になると、親が機業主に「女の子だで、他所にやらんんで、他所のご飯食べさせんと気ままでしょうがないで、管巻き教えたってえな」と頼んだり、あるいは反対に、機屋の主人の方から「学校でたら来ておくれえな」と娘たちに声をかけて予約するというような縁で就業している。自分の家の近所の機屋へ勤めた人からの話では、その人びとの親がどのような基準で娘の勤先を決めたかについてはわからなかったが、上記のように地元で信頼できる機屋を選んだであろうことは想像に難くない。しかしそれだけではなく、親類に機屋があればそこが最優先的に選ばれたであろうし、同じように娘の家と田オヤ、歩オヤ、マキの関係にある機屋がまず選ばれたであろう。小説『奴隷』のお繁の場合の機屋・駒忠は、お繁の家の田オヤであった。

もっとも、丹後機業も地元だけでは労働力が充足できず、丹後半島に散在する農漁村や、隣接する兵庫県の但馬地方、さらには鳥取県・島根県にも依存していた。この場合には機業主が縁故をたよって募集している。今回の調査できいた限りでは紡績女工の場合のような募集人あるいは仲介人に頼らず、機屋の主人が自ら出向いている。さきに述べたように丹後機業では半期毎の雇用が主流であったから、例えば盆になると織手たちは親の許へ帰ってしまう。するとその後を追うように機業主たちは手土産持参で彼女らの家を訪ね、盆以降もひきつづき自分の工場へ娘を寄越してくれるよう親に頼むのが慣わしであった。その際、新規労働力に関する情報もあつめ、見込みのありそうな家——たとえば小学校卒業が間近い娘がいるというような——を訪ねて雇用の予約をとりつけていたのである。

b) 学校教育 これまで述べた中では、娘たちの入職の時期を小学校卒業時かそれ以後としてきた。それは尋常科修了だから11才～12才で機屋奉公を始めているのだが、教育は必しも6年間受

けたわけではなかった。きき取り調査で1905(明治38)年生まれのAさんは家が漁師だったが貧しく、きょうだいが多勢いたので他家へ子守りにやられ、学校へは4年生ぐらいまで通ったが、赤ん坊を背負っては勉強ができず途中でやめたと語った。また明治39年生まれのBさんも幼いきょうだいの子守りのために学校を欠席がちになり、授業についていけなくなって3年生ぐらいで退学したと話していた。¹⁷⁾ Aさん、Bさんが学齢に達したのは明治末期である。彼女らのように義務教育を途中で放棄しなければならなかった例は、この頃の丹後地方では決して少くなかったようであるし、その後の時期においても同じような例がみられたと思われる。そしてまた、このような女子教育事情は丹後地方だけの特殊事情ではなくて、日本の農村地方一般に広く見られたことであつた。それは「織物織工事情」が物語るところで「彼ら工女の多数は辺鄙なる地方村落の者にしてその家は貧、生活の程度は低く彼ら父兄はその子女の教育につきいささかも意に介せず、12、3才にして機業伝習なる名のもとに機屋に出すか、もしくは14、5才に至れば機にても習わせておけば他日困らざらんかとの単純なる考えを抱」いているので、彼女らの中には「読書筆算は勿論自己の姓名すら書する」ことのできない者がいる。「工場主につきて工女教育の有無を聞くに全工女のうち尋常小学三年まで修業せしもの僅に十分の一くらい」と書いていた。

さらに時代が少し降った1920(大正9)年代になっても事態に好転のしるしが見られないことは『女工哀史』から知られる。大正14年に刊行されたこの書が掲げている「男工及び女工の修学程度表」¹⁸⁾によると、調査対象数は男工1,417人、女工7,210人で、このうち義務教育中途退学者の比率は、男工は15.5%に対し女工は41.6%であつた。これらの比率から考えられることは、文字が読めなかったり読めても書けず、まして文章をつづることのできない人が特に女性の中に多かったであろうということである。事実、今回の調査において高齢の婦人の中に文盲の人が少なくないとは、しばしば聞かされたことであつた。

c) 住み込み 農商務省の調査によると、丹後機業では男女とも全員が機屋へ寄宿していたが、大正期になると男子の場合は住み込むか通勤するかは本人の自由となっていた。だが女子は全員住み込みが原則で、加悦のCさんの家は機工場の直ぐ隣りだったが、それでも住み込まされていた。彼女が勤めた機屋は当時その地において最新の設備をもち隆盛を誇った工場であつたが、別に寄宿舎というものはなく、夜になれば座敷も店の間も、廊下でもどこでも空いた場所はすべて寝所に使われたという。この状態は丹後機業地一般のようであり、『女工哀史』が語る紡績工場のあの拘禁的な寄宿舎は見られなかったらしい。今回聴いた限りでは、親が機業主から前借りをしていた形跡はなかったし、半期ごとに雇用契約が更新されるのが一般的であつたから、女工の身柄を拘束しその逃亡を防ぐ必要が機業主側になかったためであろう。Cさんは工場での食事がすむと隣りのわが家へ補食をしによく帰ったと言うし、住み込みが女工の外出禁止をとまなうものであつたならば、さきにあげた「仕舞えしまえと窓からのぞく しとる仕事も手につかん」といった機織唄も歌われなかったはずである。

寝具は1人づつには与えられず、1つの蒲団に2人づつ寝かされた。小説のお繁は先輩の織手か

ら肩もみを命ぜられたり、洗濯を頼まれたりしていたが、調査ではそういう話は聞けなかった。だが年末には織手が機先に対して何がしかの歳暮をくれる慣しがあったというから、後輩たちは何らかの私用に使われていたと思われる。

また、11～12才の年頃で住み込み、毎日早朝から1日中追い使われる日々は辛かったであろう。Dさんは親類の機屋へ入職したばかりの頃、訪ねて来た父親に何時になったら家に帰れるのかを問うた。その時彼女の父は目の前の田の稲を指して「稲に穂が出て、その穂が箸の形になったら盆が来る。そうしたら家へ帰れる」と教えてくれたという。それからの彼女は毎日水汲みに出る度に稲を見つめてその日の来るのを待ったそうだが、それを思い出すと「今も胸がつぶれるほど切ない」とDさんは語っていた。

3 労働生活

a) 労働時間 手織時代の労働時間は早朝から夜は8時、9時までランプをたよりに織り、太鼓の合図とともに一斉に終業したことはさきに述べたが、その太鼓の音を憶えているEさんの話によると加悦で太鼓が使われたのは明治末期までのことであったという。力織機は手織より生産性が高いから、機屋による力織機導入の有無や程度のちがいによって、地域の機屋の操業時間に相異が生じてきたためであろうか。終業時刻を機屋ごとにきめ、鈴やサイレンなどを使って知らせるようになった。この事情はおそらく丹後の他の機業地においても同様であろう。

力織機に変ると、労働時間が朝6時から夕6時ごろまでになったといわれる。休憩時間を含めて約12時間だから手織時代と比べるとかなりの時間短縮である。私は、機業経営者は相互に競争しており、また自然エネルギーの利用は人力の限界を克服できるから、力織機の導入によって労働時間が伸びることはあっても短縮されることはないと考えていた。ところが加悦町でも網野町でも労働時間が短くなったと聞かされたし、丹後では発電所からの送電が夕方6時ごろになると動力線から電燈線へ切り換えられたので、力織機の運転は自動的に休止しなければならなかったから、労働時間も短くなったのだという説明もうけた。

しかし他方では、昭和になっても労働時間が14時間～15時間だったとする記録もある。昭和6年刊の『加悦町誌』が第1編第3章の「勤労の風あること」の項において「……殊に機業家の労働時間の1日約14.5時間孜々努勉いささかも倦厭の色なし……」と書いているのがそれである。これは今回の調査できいたことと明かに矛盾しているが、両者ともに疑えない事実であるとすれば、この矛盾をどのように考えたらよいのであろうか。大正中期は第一次世界大戦による好況で、丹後機業も増産に励んでいたが、手織がまだ主流だったから労働時間は長かった。大正9年には戦後恐慌に見舞われ減産を余儀なくされるが、ちょうどこの時期は加悦町では力織機化がほぼ完了している。しかし不況の最中だから操業時間は短縮されたであろう。加えて電力供給事情からする動力用送電の停止があった。だが電力の代りにガス又は石油発動機の利用が可能であったのだから、好況局面であったら力織機に切り換ったからといって労働時間が短縮されることはなかったであろう。そ

の後も景気の停迷がつづくが昭和5年ごろから恢復し、5～6年には機台数、生産量目、生産価額などがそれ以前の時期に比べて著増している。したがってこの時期には加悦町誌にあるように力織機による14時間～15時間労働が行われたとしても不思議ではない。このように考えると、ききとりの結果と文献記録との対立は解決されるのである。

以上もっぱら労働時間の長さを問題にしてきたが、それは1労働日に支出される労働量を測るためであった。しかし労働密度が異なれば労働の支出量は労働時間が同じであってもちがってくる。網野で会ったFさんは、その地で一二を競う大きい機工場で働いたことのある人だが、彼女によると、その工場の親方は工場を毎週一巡し、そのあと全員を集めて精勤者を賞め、怠勤者は叱る人であった。Fさんは「6時始業のときは5時に起き、工場へは5時半に入って、受持ちの3台の織機を掃除し、髪は機械に巻き込まれないよう引つめて結い、6時のサイレンが鳴るやいなや織り始める」労働生活の日々であったという。他方、同じ網野町のGさんは機業主の妻で従業員と共に機を織っていたが、そこは小規模工場で労務管理らしいものは何もしていなかったと言う。Gさんによると従業員の中には目に余るような人がいても、叱ればそれがもとで他の機屋へ移られると困るので何も言えず、ただひたすらこらえていたのであった。いま労働密度についてFさんのいた工場とGさんのいた工場とを比較するなら、明かに前者が高かったであろう。

b) 休憩と休日 1日の労働時間に関しては、その中に食事時間と休憩時間とがおのおのどの程度ふくまれているかにも注目しなければならない。なぜなら、それは労働の中断であり労働が消耗過程であるのに対して、それらは労働力の再生産過程だからである。窪田英樹の前掲書は第1回休けい（タバコ）は午前7時から8時の間に約20分間。昼食は午前10時半ごろから30分～40分間。第2回休けいも約20分間。夕食は午後4時から5時ごろの間の約30分間。第3回休けいは約15分間と記しているが、これらの休憩制度が行われていた時期が特定されていない。明治30年ごろの制度は前述のように日に3度の食事時間の他には休憩時間がなかったが、窪田によれば昼・夕食時間のほかに3回の休憩時間があったとされている。朝食の時間がないのは第1回休憩時間と重なるからであろうか。今回の調査では、休憩時間は午前と午後の1回ずつで30分間ぐらい。昼食は12時からやはり30分間ぐらいであったと聞いたが、被調査者たちの記憶が薄れていることや、機屋によって相異していたかも知れず定かでない。

織手たちは食事に時間をかけなかった。汁とご飯を別々に食べることはせず、汁かけ飯にして一挙に流し込んだ。昼食のあとは職場や適当な場所をみつけて身体を横たえ昼寝をしていた。そして機先たちはこの時間に織手に代って機を動かし、機織りの練習に励んだ等々のことは異句同音に語られたことであった。同じ織手だでも家族従業者で乳児のいたGさんの場合は昼食時になると、まづ赤ん坊のオシメを川へ洗いに行く。皆の食事が済む頃に戻って急いで食事をするのだが赤ん坊に授乳もしなければならならず、食事の後片付けもしなければならならずで30分の昼休みではとても足らなかった。その分だけ職場へ戻るのが遅れ、それだけ機織りがおくれたというように大変な日々であった。Gさんは頑健な身体で耐え「先の子が三つになれば次ができ、その子が三つになればまた

次ができるので、いつも妊娠しているか、子を負っているか」の状態を機を織りながら6人の子持ちになったが2人を失っている。その1人は1才のとき「胎毒がいっぱい出てその上風邪から肺炎になって死んだ」のだが、その子が病気になったのは汚れた風呂に入ったためではなかったかとGさんは回顧していた。当時の風呂は洗い場がなかったので皆が風呂桶の中で身体を洗っていた。それで終り頃には湯は白く濁るほどに汚れたが、赤ん坊が排便したら皆に迷惑がかかるからとの理由で、母子はいつも一番後に入浴していたのであった。

休日は毎月1日と15日、あるいは第1日曜日と第3日曜日とが定休というのが多いようだったが、なかには定休がなく、節句とか祇園祭のような紋日でないと休ませない機屋もあった。これらは農商務省調査の時代と同様である。正月と盆の休みは加悦町ではそれぞれ1か月ぐらいあり、親許へ帰った娘たちはこの期間に裁縫を習いに行っていたという。ところが網野町では、それぞれ1週間程度であったというから地域によって大きい差異があったことになる。また加悦町では農家出身者のためには田植え休みが与えられたというが、網野町では田植え休みは無かったと聞いた。盆や暮の休みがもっと短い人もあった。その人は工場に残されて蒲団の整備をさせられたからで、おそらく半年もの間、間断なく使われたであろう従業者たちの寝具を洗濯したり補修してなお数日間働いた後、やっと帰ったのであった。

c) 青春の日々 以上の休日のほか、機屋で働く人びとが楽しい日として記憶していたものに恵比須講や針供養があった。小説『奴隷』は「10月10日は恵比須講といって機屋のお祭りであった。その日は朝から仕事を休んで、奉公人一同へめったになくご馳走が振舞われる。……」と書いているが、その通りのことがどこの機屋でも行われていた。ただこの日を全一日の休みとするところと半日の休みにするところ、あるいは早仕舞して夕方からの行事にするところなど相異はあったようだ。針供養は「ようかぶき」とよび12月8日にあった。仕事が終わってからの会食で、織手のおごりで、こんにゃく、あげ、とうふを買い、米は親方が出し、料理は機先がした。Hさんは「その日は夕方からご飯を炊き、さめんように風呂敷をかけて……」と懐しんで語っていた。ただし針供養は網野町で聞いた話であって、これが丹後全域であった行事かどうかは判らない。

楽しかった思い出として、この他に、就寝前の寝床でカルタ取りに興じ夜ふかしをしておかみさんに叱られた話や、仕事を早仕舞いして行った芝居見物の帰りが遅くなり、宿舍の戸が閉って這入れないので、向いの木小屋に仲間ともぐり込んで眠った話もあった。さらにつけ加えるなら、機屋の窓の障子紙に穴をあけて村の若者たちが覗き見たことも、織手の娘たちにはやはり楽しいことであつたろう。しかしそこから発展して「丹後但馬は女の夜這い……」的風俗に馴染んだ者の中には墮胎の必要に迫られ、警察の追求を受ける破目になった例も決して少なかったようである。尤も「男持ちたし持ちゃ子ができる できりゃ五十両の金がいる」といった風俗は明治中期から末期頃までのことで、大正期になると青年団が風紀刷新の運動を行ない大いに改まったという。このため青年団と処女会との合同の行事がやり難くなった程だったが、やがて大正デモクラシーの風潮が拡がると男女間の交際は再び緩和されたのであった。再度『加悦町誌』（昭和6年刊）を引用すると、

当地の幣風として以下のように述べている。

「織女の歌、子守の歌には卑猥聞くに忍びざるものあり、ここに一日、十五日の夜間はおろか、妙令の婦女にして毎夜情夫の部屋に通うあり、夜分街頭に男女相携えてはばかりざるあり、数えあぐれば淫風滔々此の地をおおう。……（中略）……幸いにして土着の青年処女生来いまだこの風に化せられおらざることは、その多く乱すは子守り、織女、車廻しにあり。しかし多くは外来の奉公人なり。然らずんば尋常小学半途退学者なり…（以下略）¹⁹⁾…」

4 賃金と仕事

a) 賃金 織手たちは年末、盆に約半年分の賃金を支給されると封を切らずに持に帰って親に渡した。親はそれを神棚に供えてから、いくらかの小遣金を娘に与えたという。娘は家のために働いたのだからその収入は家＝親の所得となったのである。例外は勿論あったであろうが、当時は一般的な傾向であろうと思われる。

賃金額についての人びとの記憶は、それぞれ正確であろうが記録がないと、その賃金額が支払われた時期が確定できない。さいわい杉本利一氏から提供された或る織手の5年間にわたる賃金一覧表があるのでこれを紹介しよう。

この織手は1920（大正9）年に機織見習工となった与謝郡与謝村金屋のT.Nさん（以下Nと略称する）で当時13才。賃金一覧表は機屋の主人が作成したもので以下のとおりであった。（すべて大正年間であるから年号は略す）

9年3月～8月（131日半） 28円	11年9月～12年1月（124日） 61円10銭
9年9月～10年1月（122日半） 100円	12年2月～8月（124日） 65円80銭
10年2月～8月（113日半） 46円80銭	12年9月～13年2月（126日） 70円
10年9月～11年1月（121日） 55円71銭	13年3月～8月（92日半） 52円78銭
11年2月～8月（126日） 68円20銭	13年9月～14年1月（132日） 117円22銭

この表で最初の131日半に対する28円の賃金は見習工としてのものであるであろう。大正5～6年ごろに機先として働きはじめた人によると、この頃の1年間の機先（見習工）の賃金は20円にきまっていたというから、半期分で28円は高すぎるようにみえるが、大正5年～9年間の物価上昇率²⁰⁾は2.4倍弱、大正6年～9年間で2倍弱であったから、これを考慮に入れたら見習工の賃金としては妥当であろう。理解し難いのは9年9月から10年1月の間の100円の賃金である。Nが早々に織手に昇格して働いた半季分だと仮定しても、その後の賃金額の推移と比べると高すぎるのである。まして大正9年は前述のように戦後不況に見舞われた年であった。この点については次のような見解がある。²¹⁾すなわち、加悦の機業地ではこの頃、良質の労働力が不足してきており、このため機業家たちは優秀な織工の足止め策を種々めぐらしていた時期であったから、Nにも特に高額の賃金が支給されたのかも知れないというものである。丹後織物工業組合編『組合史』（1981年刊）所載の統計によると、丹後機業は第一次世界大戦による好況期（大正5年～8年）に生産数量、生産量目、生産

価額等のすべてにおいて著しく伸長していたから、上記の見解には根拠があるわけである。

さてNの賃金は当時の賃金水準に対してどの程度であったろうか。日銀が大正10年11月から新たに始めた賃金統計結果と比較すると下表のようになる。

項目 年	調査産業計		繊維および染色工業		Nの賃金
	男 子	女 子	男 子	女 子	
大正11	2. 円26銭2厘	1. 円03銭6厘	1. 円57銭4厘	1. 円04銭5厘	0. 円52銭0厘
12	2. 18 0	0. 98 1	1. 52 3	0. 97 6	0. 54 5
13	2. 24 5	0. 98 6	1. 54 1	0. 97 8	0. 73 0
14	2. 19 9	1. 00 9	1. 57 0	1. 00 5	—

日銀のこの統計は「民営工場労働者賃金」で、対象工場は職工40人以上（製糸工場については職工300人以上）。賃金額は月中賃金支払高を合計し、これを各工場の月中出勤延人員で除し、1人1日あたりを算出した「実収賃金」²²⁾である。Nの賃金は11年2月～12年1月までの2季のそれぞれ1日あたり賃金を算出してその単純算術平均値を大正11年の賃金とし、以下同じ方法で14年1月までを算出したものである。これで見るとNの賃金は極めて低い。工場規模のちがいがからであろうか、繊維染色工業部門の女子賃金の50～75%であり、男子の平均賃金（調査産業計）に対しては、23～33%でしかなかった。

しかし丹後地方においては機業の賃金がむしろ相対的に高いことを示す資料もある。それは竹野郡木津村長が大正7年6月29日付で竹野郡長へ提出した「農業労働力不足の主因等調査」²³⁾報告で、その中で機業労働と農業諸労働のそれぞれの賃金を以下のように比較しているのである。

	(機 織)	(炭 焼)	(普通農業)	(養 蚕)	(挑栽培)
男	—	1 円60銭	90銭～1 円20銭	—	1 円00銭
女	1 円50銭～1 円70銭		75銭～1 円05銭	1 円20銭	1 円00銭

みられるように機織賃金が普通農業、養蚕、挑栽培などのいずれの賃金よりも高いのであって、男子の炭焼賃金のみが辛うじて肩を並べている。だから女子労働力が機織の仕事へ吸収されて農業労働部門に労働力不足が生じているというのである。ただここで疑問が残るのは機織の賃金額が、さきにみたNの賃金額と比較すると3倍程度の高さである点だが、いまのところ解明できる手がかりがない。だが、『丹後の民謡』の編者・井上正一氏によれば、娘の多い家は、娘が機織りで稼ぐと蔵が建つと言われたというから、機業労働が他の農村労働に比べてはるかに収入の大きい仕事であったことは確かである。²⁴⁾

次にNの1日分の賃金を大正10年2月以降の8季について順を追ってあげると、41銭—46銭—54銭—50銭—53銭—56銭—57銭—89銭であった。これをみると、はじめの3季は5銭ずつ上昇したが、4季目に4銭の下落。5季目から回復するが7季までの上昇巾は1銭～3銭というように低い。そ

して8季目で一挙に12銭の上昇となっている。このような賃金額の変動はどうして生じるのであろうか。

一つは前述のように織手の技倆に応じて賃金に差等があったから、熟練度が上ったと評価されれば昇給したことである。もう一つは景気の好悪を機屋の主人が賃金に反映させたことで、加悦のIさんによれば「うちの親方は1年を3期ぐらいに分けて、たとえば1月～4月は1日60銭、5月～8月は景気がよかったから65銭というような勘定をして、その1日の賃金に働いただけの日数を掛けて支払っていた」のであった。Iさんの話は日銀調査局の報告（大正14年）と符合するもので、それは「あらかじめ幾何と定むることなく、旧正および旧盆の決算期に於て職工の帰郷するに当り、その半期間の縮緬市況、時価等を参酌して支給するを普通とした」と述べているのである。

賃金の他に現物給与もあった。機屋によって品物にちがいはあったろうが、普通は着物地で、紺紵1反とか木綿縞1反などと下駄1足が暮れに与えられ、盆にはネルの腰巻と下駄1足が支給されたようである。また長期勤続者で結婚する者には、簞司、長持、鏡台などの嫁入り道具一式とか、礼装用のちりめん生地が贈られたというが、退職金ともいふべきこの現物給与は戦時期に入ると次第に廃されてしまった。

b) 食事 丹後の機屋には通勤者も含めて従業者に一日3食を給する「喰い^{がよ}通い」の制度があったが、この給食も現物形態で支給された賃金部分である。この制度は第2次大戦中まで存続していたといわれる。

さて、給食の内容だが、加悦町での座談会で、小説『奴隷』の中にでてくる食事を比較のために紹介してたずねてみると、「大差がない」という話になった。ただ主食の中に支那米が混入されていたかどうかの点に関して存否の両論があった。網野町での座談会では「麦ご飯とみそ汁だけでした」と答えた人がいたが、よくたずねてみると「米がどこにあるかと思うような」「麦に米がひっついていような」麦の割合が圧倒的に大きい米麦混合の飯であったことがわかった。みそ汁は実が少なかったのか遅く行くと汁ばかりだったという。

機屋の主人とその家族の食事と雇傭者たちの食事との異同については、大きい機屋では格段の差があったらしい。『奴隷』の中でもお繁は「主人一家のために別鍋を一かま炊かねばならなかった。それは純日本米の白飯である」とあったが、そのようにであろう。しかし中小の機屋では全く同じものを食べていたし、中には雇傭者が食²⁶⁾べおわってからその残りを主人一家が食べるところさえあったらしい。

ところで機屋の給食は当時の農家の食事と比べて粗悪なものであったのだろうか。京都府労働経済研究所の調査報告書『丹後機業の構造分析』は「由来丹後では『チリメン屋めし』²⁷⁾といって農家より程度の悪いものと一般にされているが、それを肯定しているが、必ずしもそうではなく、比較対象とする農家がちがえば「チリメン屋めし」の方が良かったことになるのである。

小説『奴隷』の江治少年は朝食に乾し菜のおじや²⁸⁾を食べている。彼の家では「草木の数々を食糧」としていて「まず山の木ではムシコ²⁹⁾というものの葉を摘んで来、これを蔭ばしにして貯え置いて飯

にまぜる。それからお茶がきれると河辺の猫柳の葉を煎じて喫み、甘いものが食べたければ甘茶の葉で間に合わせ」ていた。正月がくると、江治の家では檜の実を砕いて自在の餅を作ったが、隣の機屋（駒忠）では白い米の餅をついていた。

今回の調査では菜飯の話がでた。菜飯は大根の乾したのを刻んで上にふりかけた飯のことである。大根葉で増量した飯で、貧しい農家では常食のようであった。婚家の姑さんが「御飯だか菜葉だか判らん」ような菜飯を炊く。それを辨當²⁸⁾につめて機屋へ行くと住み込みの仲間が同情して機屋の飯を分けてくれたとJさんは語っていた。結婚後通勤にかわったJさんには、家の飯より機屋の飯の方が良かったのである。機屋の飯がよかったとは思わないという人もあった。Kさんだが、小作農だったKさんの父が大変な働き者だったお蔭で菜飯をまぬがれていたからである。しかし「菜飯を食べていると言っておけよ」と父から言い聞かされていたということから考えると当時近隣の家では一般に菜飯を食べていたのである。

この他、農家では食事の前に芋やかいもちを食べさせるのを常としていたという。かいもち²⁹⁾は屑米の粉によもぎの葉を混ぜて作った団子である。このようにまでして米の節約に努めたのは、本来主食であるべき米が、それほど乏しかったからであろう。お繁の父親の小作農が1年間の労苦の後に家族のために残すことができた米は、たったの4俵であった。「それだけでは一家の者が3月の飯米しか無い」と細井和喜蔵は書いているが、程度の差はあってもこのような農家の事情が、貧しい食生活を生み出していたのである。裕福な農家は別として、大多数の農家における食事は「チリメン屋めし」より悪かったと考えられるのである。

お わ り に

本稿をまとめるのに当って念頭にあったのは『職工事情』と『女工哀史』とであった。周知のように前者は原生的労働関係のもとでの婦人労働事情について、後者は工場法施行後でありながら依然として家父長的家族制度が色濃く職場の労資関係を規定していた時期の婦人労働事情についての報告である。二つの報告はいずれも当時の、長時間労働、低賃金、粗悪な食事、非衛生的な寄宿施設などについて詳述しているが、これらの諸点は丹後機業においても同様であった。本稿はこれらの点を主としてまとめている。

ところで、二つの報告にはあって、丹後にはなかったと思われるもの、したがって丹後機業労働事情の特殊性と考えられるものが2点あった。第1点は強権的労働者支配とか暴力的労務管理というべきか、いずれにしてもそのような労資関係が丹後では見られなかったことである。私は『職工事情』の附録(一)および(二)に記載されている衝撃的な虐待事例に類するようなものが丹後になかったかと思い、会う人ごとに訊ねたが暴力沙汰の話はなかった。親方に撲られた話はなく、まして裸にされた、天井から吊されたなどは全く聞かれなかったのである。第2点は拘禁的な寄宿制度がなかったことである。『女工哀史』には「寄宿ながれて工場が焼けて門番コレラで死ねばよい」など寄宿を呪う唄がいくつも採録されているが、丹後ではそのような寄宿舎というものがなかった。

丹後機業の労資関係は優しかったというべきであろうか。雇う者と雇われる者との対立が厳しくないのであって、これは丹後の機織唄にも反映していて、雇主やその家族を言葉で誅するような唄がないのである。この優しさは何に由来するのであろうか。小説『奴隷』の江治少年はその祖母によって冬の戸外で木に縛りつけられたり、焼け火箸で頭を叩かれたりなどの苛酷な体罰を加えられている。お繁も父親に叩かれているから、家長による暴力的制裁は丹後においても存していたと考えるべきである。したがって、優しさを土地柄に帰することはできない。

では丹後機業におけるこの特殊性は何によって生じているのだろうか。私は雇用契約が半年ごとに更新されること、また親が娘をかたに借金をしないこと、これらが一般的であるところに因ると考える。奉公が半年季なら耐え易かったであろう。契約更新ごとに親と雇主側とが接触するので、織工の管理がしやすく、それと親の側に借金がないから雇主に対して相対的に強い立場を保ち得るところから暴力行使が抑へられたのであろう。雇主の側には前貸金がないから織工の身柄を拘束する必要がなかった。お繁の場合は親は前借りをしているが、駒忠との関係は地主と小作であったから、お繁が逃亡する可能性は無かったのである。丹後機業における労資関係の優しさについて私は以上のように考えるのだが、では、丹後では何故、半年期奉公が一般的であったのか。親が前借りをしなかった（或は機屋の側で前貸しを雇入れの手段としなかったのかも知れないが）のは何故なのか。この問題についてはいまここで論ずることはできない。

おわりに——今回の調査研究にあたって、『職工事情』や『女工哀史』その他関係する文献をあらためて読みなおして想うことは、織物女工の劣悪な労働事情を規定していたものは、当時のわが国農村の甚しい貧困と古い家族制度とであったのだということである。

（付 記）

今回の調査では、岩崎英精・井上正一・吉岡初男・杉本利一・八木康敏・中島光明・中村喜三郎・中村正哲・吉岡寛の諸氏から多くの教示をうけ、また資料を提供していただいた。大正期および昭和前期の婦人労働事情については1981年に加悦町および網野町で行った調査のための座談会に依拠するところが大きい。座談会には以下の方々が出席して下さい。〔敬称略・生年順・アイウエオ順〕

小牧留吉（1903年）・木村こと（1904年）・杉本八重子（1904年）・大内きく（1906年）・石川ちよ（1907年）・西村憲太郎（1909年）以上 加悦町。

柴田義一（1891年）・井上正一（1902年）・森田きく（1905年）・吉岡もん（1905年）・井上しげ（1906年）・池田容子（1912年）・今井みつ（1914年）・吉岡初男（1923年）・吉岡つね（1924年）以上 網野町。

なお、加悦町での座談会開催にあたっては石川忠氏と家族の方がたに特にお世話になり、網野町では網野町郷土資料館の井上館長ならびに吉岡主事両氏の深い御理解によって座談会が資料館主催のもとに行われた。

本稿をおわるに当たって調査に御協力いただいた上記の各氏およびその他たくさんの方がたに心からお礼を申し上げます。

注

1) 『職工事情』生活古典叢書4 光生館 1971年 172頁

- 2) 明治29年9月、桐生足利地方の工女を調査した横山源之助は工女の食事について「飯は米と麦と等分にせるワリ飯、朝と晩は汁はあれども昼食には菜なく、しかも汁というも特に塩辛くせる味噌汁の中へ入りたるは通例菜葉、秋に入れば大根を刻みたるものたるものありとせば、即ちこれ珍膳佳こう。お鉢引き寄せ割り飯ながめ米は無いかと眼に涙の哀歌をうたうもの、またむべならずや」と書いている。（『日本の下層社会』岩波文庫 99頁）
- 3) 中郡大宮町奥大野では昭和34年においても盆と正月の賃金の2季払いが行われていた。（『丹後ちりめん子ども風土記』文理閣 1977年 32頁）
- 4) 筆者が挿入したもの。
- 5) 明治29年の調査による。（岩波文庫版 276頁）
- 6) 「女工たちは9才から11才の年齢で子守りとして機屋に住み込み、14,5才から管巻きを習う。管巻きをし、2年間勤めた後で機先になる。機先を2,3年して、製織方法を見よう見まねでおぼろげに覚えてきた頃に織手となる」（窪田英樹『丹後のおんな』創樹社1973年 152頁）
- 7) 「社会百生活」・『家族雑誌』第2巻第1号（『日本婦人問題資料集成』第7巻 ドメス出版 186頁以下）
- 8) 窪田・前掲書は資料篇に、織手歌、糸くり歌、車まわし歌、管巻き歌を掲出しているが、この中には井上正一編『丹後の民謡』の中に見出せない唄が、僅かだがある。
- 9) 窪田・前掲書 155頁
- 10) 丹後織物工業組合編『組合史』1981年 35頁
- 11) 網野町郷土資料館主事吉岡初男氏による提示資料。
- 12) 昭和6年刊の『加悦町誌』
- 13) 最初の足踏み織機は明治18年に三重県で発明された松田式。以後、数種が作られた。生産性は、手機による1人1日の生産反数が1反ならば、足踏み織機は3反であった。（『日本産業百年史』上 日経新書 1967年 56頁）
- 14) 丹後への導入時期は京都府織物指導所技術課長中村喜三郎氏の説による。
- 15) 力織機では品質のよい糸を使用しなければならなくなったこと。および織手があぜ竹を自分で操作できるようになったため機先が不要となった。
- 16) 京都府労働経済研究所『丹後機業の構造分析』1952年 55頁以下
- 17) 埼玉県の小作農家を1926年ごろ訪ねた中西伊之助は9才になる女の子がその兄に「あんちゃん、先生は赤ん坊をおぶって学校へ来てはなんねえと言うよ。赤ん坊がわいわいと泣くからなあ」と訴えるのを聞いている。（『胎せられたる農村婦人の問題』・『婦人公論』1926年11月『日本婦人問題資料集成』第8巻 582頁）
- 18) 「いま二三工場の調査によって」とあるが、統計計数値の出所についてはこれ以上の説明がない。（岩波文庫版 231頁）
- 19) 当該書 388頁
- 20) 戦前基準生計費リンク指数による物価倍率。（相原・鮫島『統計日本経済』筑摩書房 1971年 128頁 41表）
- 21) 新井幾太郎氏の見解。1899年生れの氏は加悦町の機屋で長年働いた人。Nが評判の腕の良い織手であったことを知っていた。なおNは丹後山田辺に嫁して暮し数年前に70才台で亡っていた。
- 22) 相原・鮫島、前掲書 168頁
- 23) 前出・吉岡初男氏による提示資料
- 24) 中西伊之助が大正15年に埼玉・長野2県でした調査によると製糸女工の1日の賃金は1円50銭5厘、養蚕婦のそれは僅か38銭3厘であった。（『工場と田園の婦人労働』・『解放』第6巻第11号／『日本婦人問題資料集成』第3巻 281頁）
- 25) 日本銀行調査局「丹後に於ける縮緬機業」・京都府労働経済研究所前掲書 16頁注
- 26) 明治35年8月30日付時事新報は埼玉県の機業工女の談話をのせているが、その中で一工女は、はじめの内

丹後機業の婦人労働事情

は主人やその家族は別のものを食べていたが、「私共にひき割 1 升到米 1 合の御飯をくれるようになってからは同じ御飯を食べました。ただ味噌汁へ実を入れた時、さきへその実だけをすくってしまうだけが違って……」いたと語っている。（『職工事情附録 1』・『生活古典叢書』4 50頁以下）

27) 当該書 113頁

28) 嫁に喰い通いをさせると家事をしなくなるから弁当を持たせた——というのが吉岡初男氏の解釈である。この場合、給食費にあたるいくばくかの金額が J さんの賃金に加算されれば、それだけ婚家の収入がふえる勘定になる。

29) 横山源之助は明治29年に調査した小作人生活事情の中で彼らの食生活について「1 年、白米を食するは正月と春秋 2 度の祭礼に於てのみ、平日は方言ゾロと稱する、粉に碎米を加えたるカユを食して一生涯をおわる」と書いている。（『日本の下層社会』岩波文庫 258頁）

1983年 7 月20日受理